

モンゴル帝国に立ち向かった人々 ～ロシアと中国～

第14期社会工学研究会
アジアダイナミズム班

学部生 : 野中, 高, 中西, 村上, 日高
大学院生 : 杉, 須貝, 小柳
指導教員 : 金美徳, 水盛涼一

✓ アジア班が目指す論文は、歴史の視点から「**現代的意義**」を見出す

✓ 「**文献研究**」と「**フィールドワーク**」を中心に研究活動を行う

✓ フィールドワークは**モンゴル、ロシア、中国の研究者**にヒアリングを行う

モンゴルに立ち向かった人々 ～ロシアと中国～



ロシア

出典：宮野裕『「ロシア」は、いかにして生まれたか——タタールのくびき』（NHK出版、2023年6月）



中国

出典：劉福通起義 <https://www.mdhist.com/plebeian/4128/>

地理：モンゴル帝国のアジア統一（13世紀）

再掲

13世紀

1250年 モンゴルによるルーシ支配が徐々に確立(徴税・徴兵)



出典：<https://jugo-blog.com/history-of-asia2>

地理：モンゴル帝国が衰退・明の時代（14-15世紀）

再掲

14-15世紀

1480年 ロシアのジョチ・ウルスへの貢納が終了
モンゴルのロシア地域支配が終了 (240年間)

1351年 紅巾の乱
1368年 明 建国



モンゴルから最初に独立した「ロシア」と「中国」に注目

■■■ モンゴル帝国のアジア統一時の領域

出典：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

年表：中国・モンゴル・ロシア・中国宗教・日本

再掲

世紀	中国・モンゴル帝国	ロシア	中国宗教	日本
8-13世紀	705年 武則天失脚 唐の復活 755年 安史の乱 1271年 元 建国	1223 チンギス・ハーンの武将ジェベらがルーシ攻撃開始 1227 チンギス・ハーン没、ジョチ・ウルス(キプチャク・ハン国)をジョチの長子のバトゥが引き継ぐ(ジョチはチンギス・ハーンの長子) 1236-42 バトゥの率いる軍がヨーロッパ侵攻(第一次、第二次) 1243 ボルガ河畔のサライをジョチ・ウルスの都と定める 1250年代 モンゴル(タタール)によるルーシ支配 (徴税・徴兵)が徐々に確立 1266 ジョチ・ウルスがモンゴルから分離	694年 マニ教が中国に伝来 南宋末頃、マニ教と弥勒信仰が習合した 白蓮教 が生まれる 元時代は布教の公認を受けるも→何度も禁止令	894年 遣唐使廃止 1274年 文永の役 1281年 弘安の役
14-16世紀	1305年 元が5つに分裂 1368年 明 建国 1383年 明で海禁政策開始 1567年 明が海禁を緩和	1480 ロシアのジョチ・ウルスへの貢納が終了 モンゴル(タタール)のロシア地域支配が終了(240年間)	1338年、白蓮教の反乱が起こるも鎮圧 1351年、 紅巾の乱 ：北宋の末裔を名乗る教祖韓山童が河南で反乱を起こす(東系紅巾軍) 呼応した安徽の紅巾軍配下に 朱元璋 がいた 1351年、湖北で徐寿輝が皇帝を名乗る(西系紅巾軍) 1368年 朱元璋が元を倒し皇帝になる。これとともに白蓮教を禁止	1350年 倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化) 1419年 応永の外寇 1467年 応仁の乱 1587年 豊臣秀吉によるバテレン追放令
17-18世紀	1644年 明が滅亡、満州族である清(1616年建国)の時代へ	1700 クリミア・ハン国への貢納が終了	清政府は取り締まるべき宗教を内容にかかわらず「白蓮教」とまとめて呼称し弾圧 1796年 嘉慶白蓮教徒の乱	1639年 鎖国 1612年 キリスト教禁止令
19世紀				1858年 米修好通商条約 1868年 五榜の掲示
20世紀	1911年 辛亥革命 1912年 清が滅亡、中華民国誕生			1910年 韓国併合 1972年 日中国交正常化

モンゴルに立ち向かった人々：2つの視点

再掲

ロシア視点：モンゴルに制圧され「くびき」を負わされていた？

- モンゴル帝国に支配された周辺地域の一つに「ロシア」がある
モンゴルが与えたロシアへの影響に対する様々な見方が存在していた
 - ☞ 現代のロシアの行動を読み解くヒントとしての歴史的な影響があったのか？



↑くびき

中国視点：漢民族がモンゴル族に支配されていた？

- モンゴル帝国(元)を滅ぼしたのは白蓮教を基とする中国の秘密結社「紅巾党」だった
 - ☞ なぜ宗教集団の秘密結社だったのか？
 - ☞ モンゴル族・漢民族という民族対立はあったのか？
 - ☞ 元の統治制度は、その後続いた明や清にどのように影響を及ぼしたのか？

ロシア

❑ **栗生沢 猛夫** (くりうざわ たけお)
(著書『タタールのくびき』など。北海道大学名誉教授)

❑ **宮野 裕** (みやの ゆたか)
(著書『「ロシア」は、いかにして生まれたか』など。岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授)

中国

❑ **山田 賢** (やまだ まさる)
(著書『移住民の秩序』『中国の秘密結社』等。千葉大学副学長)

❑ **菊池 秀明** (きくち ひであき)
(著書『広西移民社会と太平天国』『ラストエンペラーと近代中国』など。国際基督教大学アジア文化研究所所長)

支配

モンゴル

支配

❑ **赤坂 恒明** (あかさか つねあき)
(著書『ジュチ裔諸政権史の研究』ラシード=アッディーン『集史』翻訳など。内蒙古大学蒙古学学院蒙古歴史学系の特聘副研究員)

❑ **川口 琢司** (かわぐち たくじ)
(著書『ティムール帝国支配層の研究』『ティムール帝国』など。藤女子大学文学部講師)

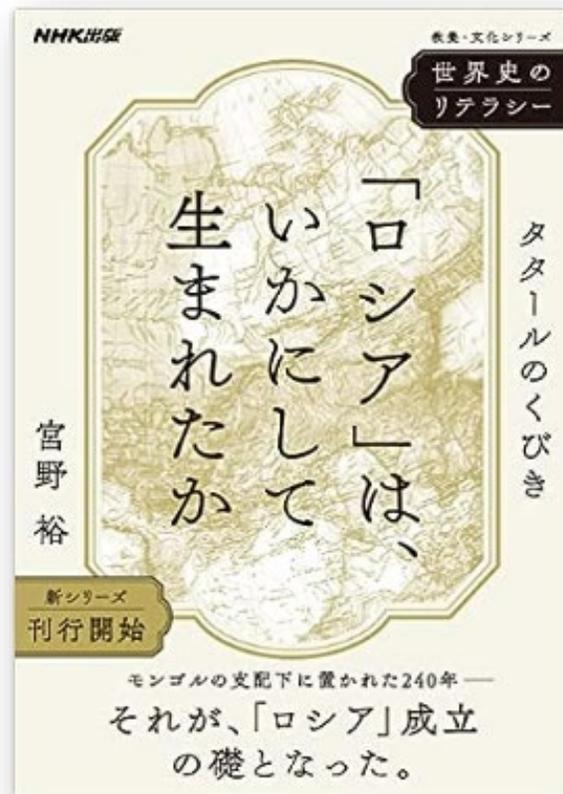
フィールドワーク(1) : モンゴル帝国とロシアの関係

ロシア

宮野 裕 (みやの ゆたか) 教授

- 岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授
- 著書『「ロシア」は、いかにして生まれたか』など

2023/07/29 「モンゴルとロシア (ルーシ)」



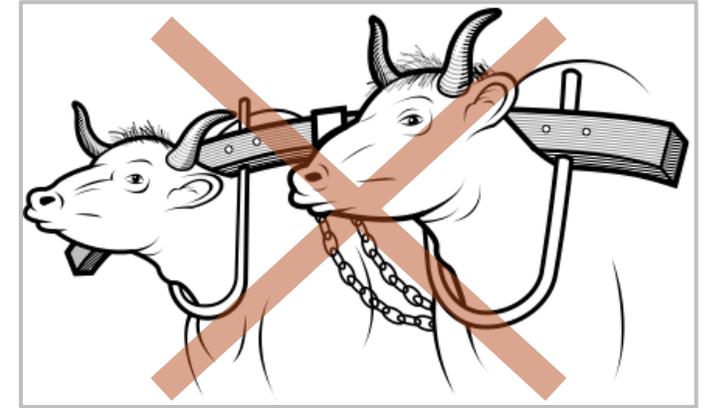
出典：宮野裕『「ロシア」は、いかにして生まれたか——タタールのくびき』（NHK出版、2023年6月）

フィールドワーク(1) : モンゴル帝国とロシアの関係

ロシア

1. 「タタールのくびき(モンゴル帝国による圧政)」は後から作られたイメージ

- 1250-1480年(240年間)のタタール(モンゴル)の支配の中で、当時のルーシ(ロシア)の民は「くびき」という憎悪の認識は無かった
- 13世紀当時の知識人「ロシア正教会聖職者」により自己中心的に残された被害者側史料から19世紀の人々が受容し「モンゴル=悪」という被害者意識の中で「タタールのくびき」という黒歴史として語り継がれてしまった結果である
- モンゴル側の主張(文書)は中国・イラク方面については残っていたが、ロシアについての文書はほとんど残っていないため、ロシア側の一方的な言い分のみが残っている
- 16世紀初頭、ジョチ・ウルス崩壊後、ロシアのイヴァン雷帝はカザン・カン国他などを征服。その後のシベリア統制において、タタールの慣行を一部利用したため、ロシアがモンゴルを「相続」したとする見方もあったが一つの側面に過ぎない



タタールの「くびき」は無かった



1902年セルゲイ・イワノフ画「バスカク」も無かった

「タタールのくびき」も「ロシアはモンゴルの後継者」も
どちらも極端すぎる見方である

フィールドワーク(1) : モンゴル帝国とロシアの関係

ロシア

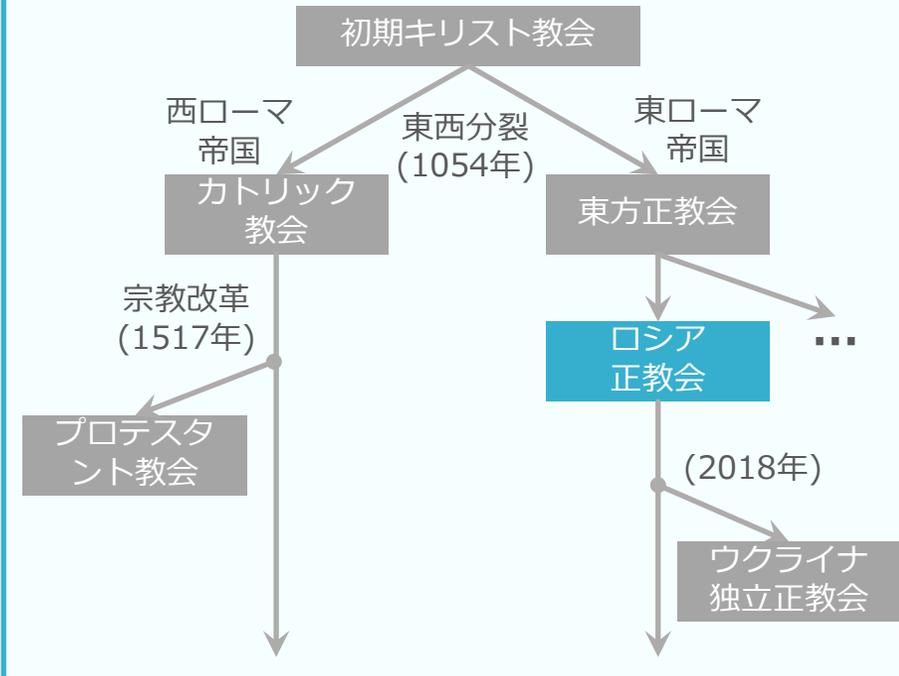
2. 西欧はカトリックの圧力が激しく、宗教に寛容なモンゴルをロシア諸侯が選んだ

- 13世紀初頭のルーシ(ロシア)では、東ローマ帝国が滅亡し(1204年)、統一政権がくずれ、群小の公国が乱立していた最中、モンゴル帝国軍がルーシへ侵攻(1250年)
- 西欧からは、ローマ教皇率いるカトリック教会の圧力があつた。教義・信仰の強要や、ドイツ騎士団などの侵攻もあり、「**ロシア正教会**」としては**カトリック側と手を結ぶ選択肢は無かつた**
- モンゴル帝国の統治は、モンゴルの慣習や納税など**一定のルールに従う限り**、ある程度の**自律が許されていた** (外れた行為については、厳しい罰を与えられた)
- モンゴルはシャーマニズム(チンギスは「天(神)」の代理人)を持っていたが、**宗教には寛容**でキリスト教、仏教、イスラム教等、自由に信仰できた

ロシアのウラジーミル大公(聖アレクサンデル・ネフスキー)は、ロシア正教会と共に、**タタール(モンゴル)従属を決意**しモンゴルの**朝貢国**となった

【ロシア正教会とは】

キリスト教会の教派で、カトリック教会、プロテスタント教会と並ぶ3大教派の1つ。このうちロシア正教会は最大規模の独立正教会。現代のロシアでは正教徒が多数派を占める。

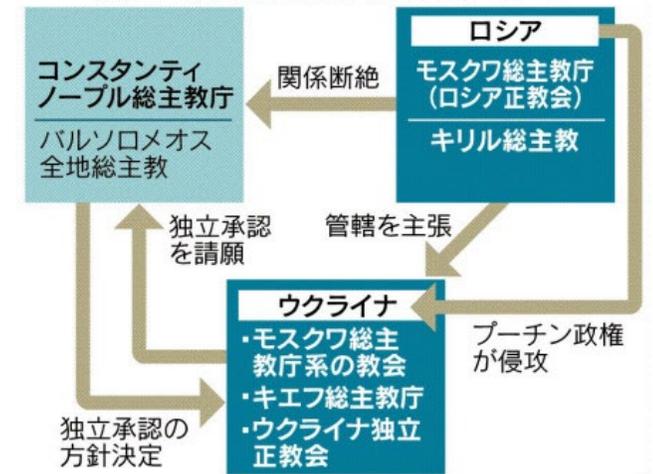


3. 現代のロシアへの影響

- ロシアはモンゴル帝国の支配を経て、西欧でもなくアジアでもないユーラシアの超大国になったことは事実
- ソ連時代は宗教が禁止されていたが、1988年にゴルバチョフが信仰の自由を認めロシア正教会が復活。現在も**ロシア国民が信仰している最大の宗教が「正教」**である
- ウクライナでは、モスクワ総主教庁系の「ウクライナ正教会」があったが、**モスクワからの独立を望む勢力が「ウクライナ独立正教会」を設立**。ただし「勝手な独立」は許されず、コンスタンティノープル総主教庁も認めなかったが、ロシアのクリミア併合など多様な理由により、**2018年に「ウクライナ独立正教会(ウクライナ正教会・キエフ総主教庁、ウクライナ独立正教会を統合)」が発足**、これらの正教会に及ぶ不和が「モスクワとコンスタンティノープルの断交」に発展
- キエフにしかなかった「ウラジーミル大公(ロシア正教をもたらした人物)の銅像」をモスクワのクレムリン横に立て、キエフがロシアの古都であることを主張
- ロシア正教会の総主教は、**ウクライナ侵攻を積極的に支持**

ロシアにおいて**宗教**と**政治**は密接に繋がっている

東方正教会の関係は複雑化している



出典：日本経済新聞(2018年11月21日：Link)



出典：NHK[国際報道2023] 2023年4月17日放送

フィールドワーク(1) : モンゴル帝国とロシアの関係

ロシア

まとめ 西欧カトリックは強硬な侵攻や改宗の強要があった一方、モンゴル帝国は宗教に寛容で教会に免税も認めたため
ロシア (ルーシ) はモンゴル (タタール) の支配を受け入れ、一定のルールに従いつつ自律していた



ボニファティウス8世
第193代 ローマ教皇
(在位 : 1294年 - 1303年)

【西欧・ローマ帝国】
キリスト教会

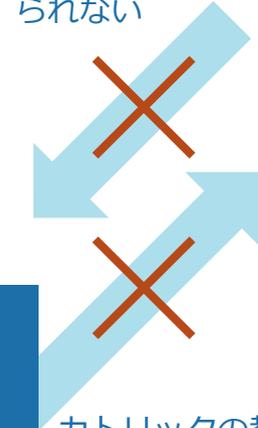
カトリックとの
違いを主張



ウラジーミル1世

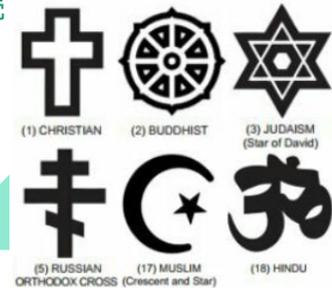
【ロシア公国】
正教会

助けを求め
られない



カトリックの教義の強要、改宗要求、
十字軍の侵攻など強硬姿勢は受け入
れられない

ルールを守り
従属を決意
正教会は存続



(1) CHRISTIAN (2) BUDDHIST (3) JUDAISM (Star of David)
(5) RUSSIAN ORTHODOX CROSS (Crescent and Star) (18) HINDU



シャーマニズム

【モンゴル帝国】
シャーマニズム・天(神)

※チンギスは「天(神)」の代理人

残酷な部分や専制制度をモンゴルから
「相続」しておらず、「モンゴル帝国の
後継者」とは言えない

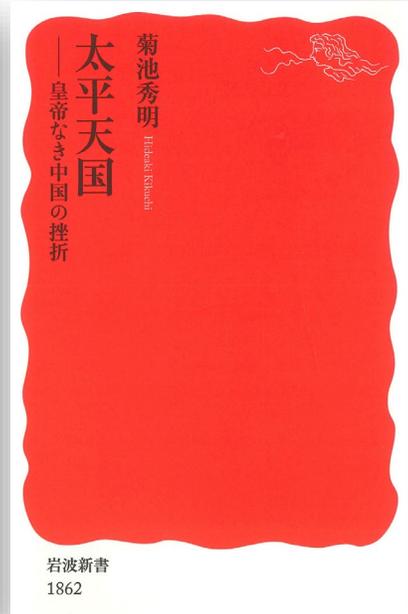
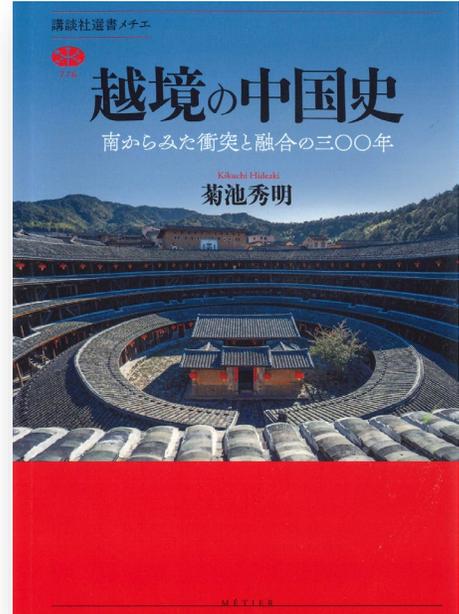
宗教が政治のバランスを動かしていた

フィールドワーク(2) : 台湾の宗教と政権の関係

菊池 秀明 (きくち ひであき) 教授

- 国際基督教大学アジア文化研究所所長
- 著書『越境の中国史—南からみた衝突と融合の三〇〇年』
『太平天国—皇帝なき中国の挫折』など

2023/08/12 「台湾の民間信仰と公権力
—2023年7月の調査から—」



フィールドワーク(2)：台湾の宗教と政権の関係

中国

1. 台湾の「廟」に見られる宗教と統治の関係

- 台湾では、大陸から渡ってきた漢人の民間信仰である媽祖^{まそ}を祀った廟(寺院)が多い(媽祖：まそ、天上聖母、航海の安全を守る女性神)
- 媽祖廟には清の**権威のある皇帝や将軍等の書が描かれた「扁額」**や「**碑文**」が多く奉納された
- 奉納者**は財を成した者、反乱を鎮圧した軍人などの権力者で、扁額は彼らの「**権威の象徴**」だった
- 多くの人々の目につく場所である廟(寺院)に、扁額や碑文を設置することで「**権威を示す装置**」として**宗教を政治に利用**した
- 鄭成功から国民政府まで歴代台湾の政権は「**外来政権**」であり、漢人移民の宗教施設に庇護を与えることで、**統治の正当性を主張**した



媽祖に代表される漢人の民間信仰は、**公権力の公認・庇護**を受けつつ、**有力移民の支配秩序を支えるネットワーク**として機能した

台南・天后宮の匾額と対聯（清朝官僚だった姚瑩の名も）

フィールドワーク(2)：台湾の宗教と政権の関係

中国

2. 台湾と中国大陸との相違点

- 【中国】では、天命を受けた君主(天子)が天下を統治するという思想があり、壮麗な王宮などを建築することで天命を受けたことを表した
→ **権威の象徴 = 王宮(建築物)というシステム**
- 【台湾】では、中国の統治が直接的に及ばないため、現地の権力者の権威を正当化するツールを必要とした
→ **媽祖廟の「扁額」や「碑文」が権威を示す装置として利用された**



紫禁城(明王朝と清王朝の旧皇宮に当たる伝統建築)



台南・赤坎楼と清朝関係者の碑文群 (満洲文字の碑文も)



満洲文字で書かれた碑文



西螺福宮の媽祖像と義勇の首領王得禄が掲げた「水徳増光」額 (1839年)



義勇の首領王得禄が掲げた額



元鄭氏政權「施琅」の扁額

林爽文反乱を鎮圧した將軍福康安の扁額

反乱鎮圧後、乾隆帝が賜った扁額

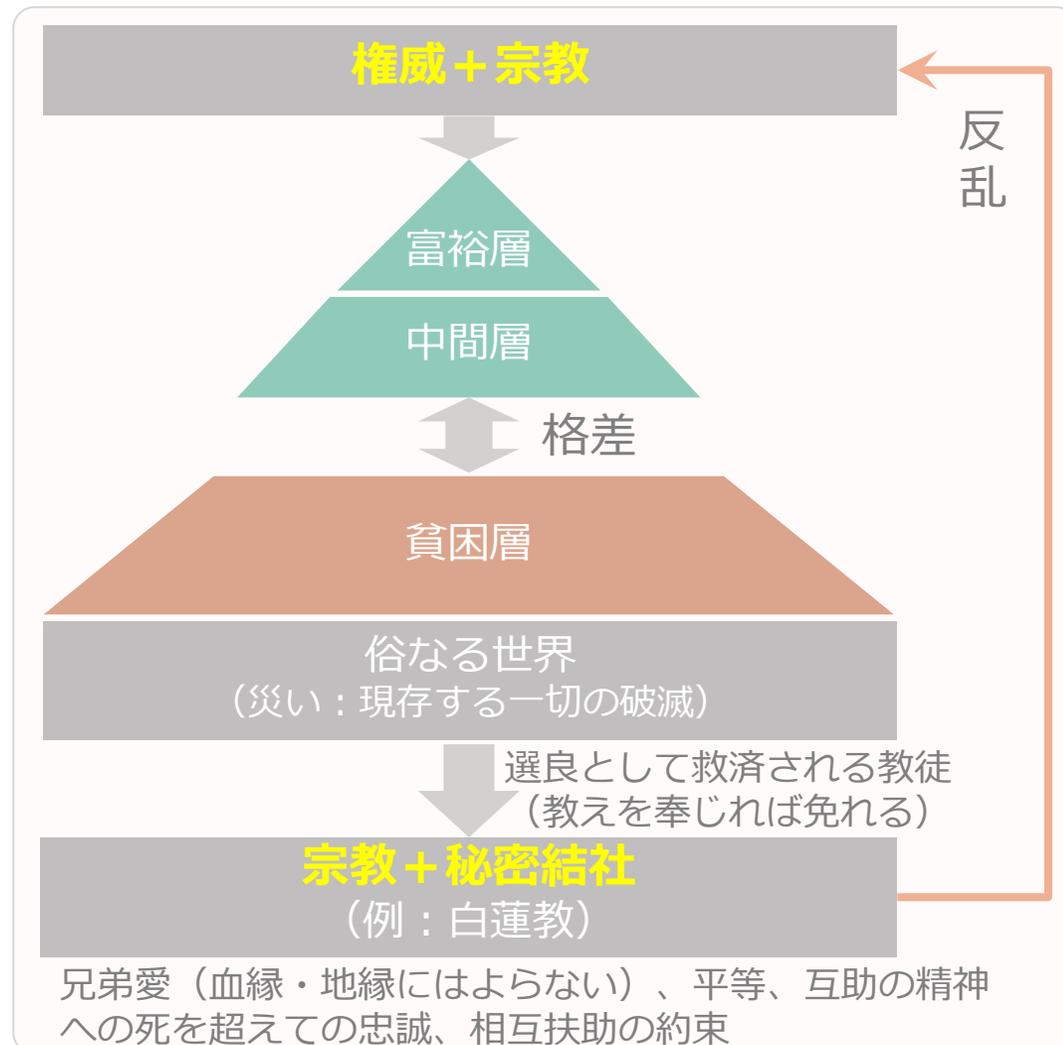
天后宮に掲げられた清朝関係者の匾額

台湾では統治者の権威を示す装置として「**宗教**」を**間接的に利用**した

3. 反乱の構造と宗教：台湾と中国の共通点

- 反乱の構造には中国と台湾で共通点がある
- 「**中間層・富裕層**」は、血族・地縁といった**インナーサークル(セーフティネット)**があった
- 貧富の格差が広がり「**貧困層**」が拡大した時期に、**末世思想の宗教・秘密結社**（白蓮教など）が広まった
- それらの勢力が拡大し、蜂起につながった
（例：元を倒した白蓮教徒の民衆反乱「紅巾の乱」など）

信仰心を利用することで、
大衆を組織化し、反乱を正当化した



フィールドワーク(2) : 民間信仰と公権力

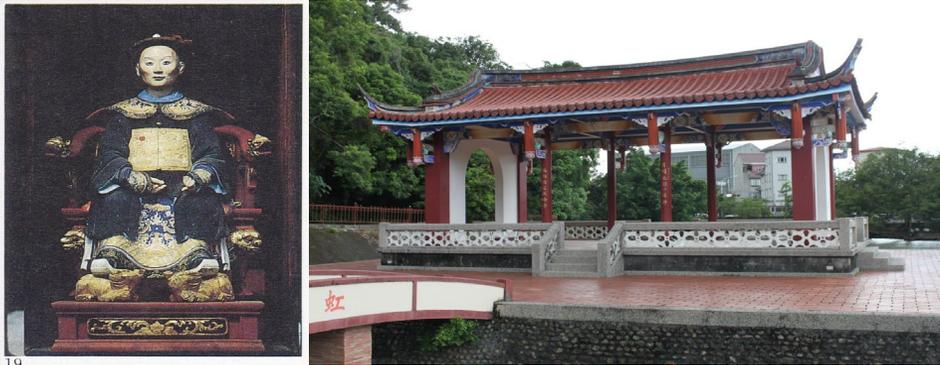
中国

まとめ

台湾では統治者・有力者側が、中国大陸では反乱を主導した側が、それぞれに目的や方法は違うものの、**自らの権威を正当化するために宗教を利用していた**

統治側（権力者）

- 台湾の有力移民の支配秩序を支えるネットワークとして機能した
- 既存の民間信仰、皆が信じる人々の目につきやすい寺院、権威の象徴



太平天国の乱で軍功を上げた林文察は、ライバルの財産を没収、媽祖が降臨し撃退したとし、台湾5大家族の1つとして莫大な資産を築いた

開かれた公の宗教信仰を利用

反乱側（貧窮農民・下層民衆）

- 反乱の正当化 = 既存の権威の否定のために、宗教 = 秘密結社が使われた
- 新興宗教・秘密・末世思考(信じる者だけが救われる)
例：白蓮教による紅巾の乱(1351年～)
太平天国の乱(1851年～)



紅巾をまとった白蓮教徒がモンゴルを倒したことを描いた絵

閉じられた宗教信仰(秘密結社)を利用

統治側、反乱側ともに**権威の正当化に宗教を利用した**

【NEXT ACTIONS】 気づき・今後調べていきたいこと

歴史的 position 付けのさらなる整理

- ✓モンゴル帝国の中での宗教の位置付けは？
- ✓元の権力を転覆させた白蓮教の詳細調査
- ✓中国、ロシアそれぞれのモンゴルとの関係に類似性はあるか？
- ✓キリスト教カトリックと、正教、ロシア正教の関係は？
- ✓中国で権力を揺るがした宗教や秘密結社の例を調査
- ✓中国では台湾のような寺院や扁額での宗教の政治利用はなかったのか？

現代的意義へのチャレンジ

- ✓現代のロシアにおける宗教の影響は？
- ✓現代の中国の宗教とイデオロギー(共産党)の関係は？
- ✓デモクラシーが発生する前の時代に、権力の転換をもたらす力の一つとして宗教が果たした役割は？

アジアダイナミズム班 活動記録 (1)

回	日付	議題	発表者	発表テーマ、文献調査、フィールドワーク	備考
1	2023/4/15	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 今年度テーマ方向性 			<ul style="list-style-type: none"> 春学期スケジュール確定 (参考文献)中国の秘密結社
2	2023/4/22	<ul style="list-style-type: none"> 中国の宗教の位置づけ 参考資料を読んだ問題意識発表(1) 	高、日高、杉	「中国の秘密結社」	<ul style="list-style-type: none"> メンバー確定 連絡用Classroom作成
3	2023/5/13	<ul style="list-style-type: none"> 仮題『モンゴル帝国と宗教・秘密結社』 問題意識発表(2) 	村上、須貝	「中国の秘密結社」	(参考資料) 論文起案例
4	2023/5/20	<ul style="list-style-type: none"> ゼミ長・副ゼミ長確定 問題意識発表(3) 	高、福満	「中国の秘密結社」	・共同作業用Google Drive設定
5	2023/5/27	<ul style="list-style-type: none"> 問題意識発表(4) 研究計画発表へ向けたスケジュールとアクションプラン 	日高、小柳	「中国の秘密結社」ほか	寺島学長より、ロシアとモンゴルの関係について指摘
6	2023/6/3	新テーマ：ロシアとモンゴルについて議論	-	「中国の秘密結社」 「Empire's Twilight」 など	
7	2023/6/10	中間発表に向けて発表・議論(ロシア)	杉	「タタールのくびき」 「イースタニゼーション」 など	
8	2023/6/17	研究計画発表の資料作成	-		
9	2023/6/24	研究計画発表	全員		
10	2023/7/1	中間発表に向けて発表・議論(中国)	高	現代中国の秘密結社、中国の秘密結社の3パターン	
11	2023/7/8	中間発表に向けて発表・議論(中国)	日高	紅巾の乱と白蓮教	
12	2023/7/15	中間発表に向けて発表・議論(中国)	中西	「欧米社会の集団妄想とカルト症候群」	

アジアダイナミズム班 活動記録 (2)

回	日付	議題	発表者	発表テーマ、文献調査、フィールドワーク	備考
13	2023/7/22	中間発表に向けて発表・議論(ロシア)	杉	「『ロシア』はいかにして生まれたかータートルのくびき」	
14	2023/7/29	フィールドワーク(宮野裕先生)	-	モンゴル帝国とロシアの関係	
15	2023/8/12	フィールドワーク(菊池秀明先生)	-		@大学院品川キャンパス
16	2023/8/15	合宿発表資料準備	全員		オンライン
17	2023/8/18	合宿発表資料準備	全員		オンライン
18	2023/8/22	合宿発表資料準備	発表担当者		オンライン
19	2023/08/23-24	合宿・中間発表	発表担当者		@箱根水明荘



秋学期スケジュール(未定)

回	日付	議題	発表者	発表テーマ、文献調査、フィールドワーク	備考
	秋学期				
17	9/16	↓秋学期日程は未定			
18	9/23				
19	10/7				
20	10/14				
21	10/21				
22	10/28				
23	11/4				
24	11/11				
25	11/18				
26	11/25				
27	12/2	AL祭?			
28	12/9	論文第一稿完成?			
29	12/16				
30	12/23	最終発表?			
31	1/6				
32	1/13				
33	1/20	懇親会?			

参考文献・論文 (1)

1	.	山田 賢 『中国の秘密結社』 (講談社、 1998)
2	.	東郷孝仁 『紅巾の乱研究の動向と課題』 (兵庫教育大学東洋史研究会 『東洋史訪』 第1号、1995年3月、 1995)
3	.	- 『【世界史】 宋と元の時代 モンゴル人の支配 5分でわかる！ 寛大な統治の仕組み』 (TryIt 高校世界史B、)
4	.	Bickers, Robert, and Tiedemann, R.G. 『The Boxers, China, and the World』 (Rowman & Littlefield Publishers、 39275)
5	.	Own, David, and Heidhues, Mary F. Somers 『Secret Societies Reconsidered: Perspectives on the Social History of Early Modern South China and Southeast Asia』 (Routledge; 1st edition、 34334)
6	.	Heckethorn, Charles William 『"The Secret Societies of All Ages and Countries: Volume One" (1897)』 (Independently published、 43432)
7	.	Studysmarter 『Decline of Mongol Empire』 (https://www.studysmarter.co.uk/ 、)
8	.	- 『The Decline and Fragmentation of the Mongol Empire, 1256-99』 (https://www.massolit.io/ 、)
9	.	Jackson, Peter 『From Genghis Khan to Tamerlane: The Reawakening of Mongol Asia』 (Yale University Press、 2024)
10	.	- 『The Yuan dynasty in China (1279–1368) - Decline of Mongol power in China』 (https://www.britannica.com/ 、)
11	.	Morgan, David 『"The Decline and Fall of the Mongol Empire"』 (Cambridge University Press、 40087)
12	.	Bennett, H, Ryan 『THE RISE AND FALL OF THE MONGOL EMPIRE: THE FALL DUE TO INTERNAL STRUGEL AND DISEASE』 (https://www.academia.edu/ 、 42844)
13	.	杉山正明 『モンゴル帝国と長いその後』 (講談社、 2016)
14	.	寺島実郎 『人間と宗教』 (岩波書店、 2021)
15	.	東郷孝仁 『杜遵道と紅巾の乱——元末「紅巾」登場の背景』 (兵庫教育大学東洋史研究会 『東洋史訪』 第3号、1997年3月、 1997)
16	.	東郷孝仁 『徐壽輝西系紅巾軍の内部構造——元末天完政権の体質と限界』 (兵庫教育大学東洋史研究会 『東洋史訪』 第7号、2001年6月、 2001)
17	.	野口鉄郎 『明代白蓮教史の研究』 (雄山閣、 1986)
18	.	綾部恒雄 (監修), 野口鉄郎 (編集) 『結社が描く中国近現代 (結社の世界史 2)』 (山川出版社、 2005)
19	.	綾部恒雄 (監修), 福田アジオ (編集) 『結衆・結社の日本史 (結社の世界史 1)』 (山川出版社、 2006)
20	.	綾部恒雄 (監修), 福井憲彦 (編集) 『アソシエイションで読み解くフランス史 (結社の世界史 3)』 (山川出版社、 2005)
21	.	綾部恒雄 (監修), 川北稔 (編集) 『結社のイギリス史 (結社の世界史 4)』 (山川出版社、 2005)

参考文献・論文 (2)

22	綾部 恒雄 『クラブが作った国 アメリカ (結社の世界史 5)』 (山川出版社、 2005)
23	壇上寛 『明の太祖 朱元璋』 (筑摩書房、 2020)
24	壇上寛 『永楽帝 一華夷秩序の陥穽』 (講談社、 2012)
25	『秘密結社 世界を動かし続ける沈黙の集団』 (日経ナショナルジオグラフィック社、 2018)
26	杉山正明 『モンゴル帝国の興亡〈上〉』 (講談社、 35205)
27	杉山正明 『モンゴル帝国の興亡〈下〉』 (講談社、 35236)
28	Wikipedia 『モンゴルのルーシ侵攻』 (Wikipedia、)
29	Wikipedia 『タタールのくびき』 (Wikipedia、)
30	栗生沢猛夫 『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の研究』 (東京大学出版会、 2007)
31	Wikipedia 『露蒙関係』 (Wikipedia、)
32	MANAEV, GEORGY 『「タタールのくびき」 モンゴル帝国のロシア侵攻・支配の実像』 (Russia Beyond、 43999)
33	MANAEV, GEORGY 『The Mongol invasion was the reason Russia formed』 (Russia Beyond、 43999)
34	Halperin, Charles J 『ロシアとモンゴル—中世ロシアへのモンゴルの衝撃』 (図書新聞、 39508)
35	Halperin, Charles J 『Russia and the Golden Horde: The Mongol Impact on Medieval Russian History』 (Indiana University Press、 1987)
36	Halperin, Charles J 『George Vernadsky, Eurasianism, the Mongols, and Russia』 (Cambridge University Press、 42762)
37	Perrie, Maureen 『The Cambridge History of Russia: Volume 1: From Early Rus' to 1689』 (Cambridge University Press、 2006)
38	Curtin, Jeremiah 『The Mongols in Russia』 (Boston, Little Brown、 1908)
39	Leo de Hartog 『Russia and the Mongol Yoke: The History of the Russian Principalities and the Golden Horde, 1221-1502』 (British Academic Press、 1996)
40	Jackson, Peter 『The Mongols and the Islamic World: From Conquest to Conversion』 (Yale University Press、 2017)
41	栗生沢猛夫 『中世ロシアの法文化とモンゴル支配』 (「スラブ・ユーラシア学の構築」 研究報告集, no. 24 (2008年): 1-24、 2008)
42	新藤義彦 『モンゴル・タタールのロシア支配』 (アジア研究所紀要 4 (1977年): 129-50.、 1977)
43	宮野 裕 『世界史のリテラシー 「ロシア」 は、 いかんにして生まれたか タタールのくびき』 (NHK出版、 45056)

参考文献・論文 (3)

44 .	Charles J. HALPERIN, Russia and the Golden Horde : the Mongol impact on medieval Russian history. Indiana University Press, 1985. (中村正己訳『ロシアとモンゴル——中世ロシアへのモンゴルの衝撃』図書新聞、2008年3月)
45 .	The Mongols in Russia_03curtgoog
46 .	アレクサンドル=ボブロフ・越野剛・宮野裕・毛利公美・佐光伸一「東方の知られざる人々の物語」(『スラヴ研究』第52号、2005年) 52-010
47 .	伊丹聡一朗「書評：J. フェネル著、宮野裕訳『ロシア中世教会史』」(『駿台史學』第167号、2019年9月) sundaishigaku_167_166
48 .	宇山智彦「ロシアと中央アジア」(荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第17巻「近代アジアの動態——一九世紀」岩波書店、2022年7月、焦点)
49 .	宮野裕「「新出の異端に関する物語」覚書——15世紀末のヨシフ・ヴォロツキーと府主教ゾシマとの論争の考察の前提として」(『西洋史論集』第9号、2006年3月) 9_62-91
50 .	宮野裕「14-15世紀モスクワの国家と教会」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第57号、2018年2月) 14-15世紀モスクワの国家と教会
51 .	宮野裕「14世紀のストリゴリーニキ「異端」と正統教会」(『スラヴ研究』第46号、1999年) 46-003
52 .	宮野裕「15世紀におけるモスクワ教会の独立とその正当化作業——フェラーラ・フィレンシエ公会議観の変化を中心に」(『西洋史論集』第11号、2008年7月) 11_60-90
53 .	宮野裕「15世紀末のロシアにおける修道制批判とヨシフ・ヴォロツキーによるその処理方法」(『西洋史論集』第8号、2005年3月) 8_1-24
54 .	宮野裕「On the so-called 'Pravosudie Mitropolich'e」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第54号、2015年2月) KJ00009710019
55 .	宮野裕「イヴァン三世の一四九七年法典における多文化性——「刑事条項」を中心に」(『ロシア史研究』第80号、2007年5月) 80_KJ00004604561
56 .	宮野裕「イヴァン三世時代のモスクワ国家における宮廷問題と「異端者」」(『ロシア史研究』第75号、2004年11月) 75_KJ00002625875
57 .	宮野裕「キエフ府主教ヨアン2世の『カノン回答集』——中世ルーシへの導入のあり方を中心に」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第60号、2021年2月)
58 .	宮野裕「ストリゴリーニキの「書物」をめぐる最近の論争——『偽の教師についての講和』を中心に」(『西洋史論集』第1号、1998年7月) 1_1-14
59 .	宮野裕「ヤロスラフ賢公の教会規定——解説と試訳・訳注」(『北方人文研究』第2号、2009年3月) 05_p81-100
60 .	宮野裕「ヨシフ・ヴォロツキーの「ノヴゴロドの異端者」像——中世ロシアの異端論駁書『啓蒙者』簡素編集版を中心に」(『西洋史学』第212号、2003年) 212_44
61 .	宮野裕「ロシア・ビザンツ」(『史学雑誌』第114巻第5号、2005年5月、「2004年の歴史学界 回顧と展望」「ヨーロッパ」「中世」)114_KJ00003653717
62 .	宮野裕「ロシア正教会の異端対策の展開——一五世紀のストリゴリーニキ異端への対策を中心に」(『ロシア史研究』第67号、2000年10月) 67_KJ00001526626
63 .	宮野裕「一四世紀後半から一五世紀初頭のモスクワ大公権力と教会権力」(『ロシア史研究』第98号、2016年7月) 98_3
64 .	宮野裕「十五世紀末のロシア正教会における正統と異端——「ノヴゴロドの異端者」を中心に」(『史学雑誌』第113巻第4号、2004年4月) 113_KJ00003653315
65 .	宮野裕「書評：パシコヴァ『一六世紀前半のロシア国家における地方支配——代官と郷司』」(『スラヴ研究』第50号、2003年) 50-014
66 .	宮野裕「新刊紹介：V・L・ヤーニン著、松木栄三・三浦清美訳『白樺の手紙を送りました——ロシア中世都市の歴史と日常生活』山川出版社、2001年5月」(『史学雑誌』第113巻第12号、2004年12月) 113_KJ00003653253
67 .	宮野裕「新刊紹介：シネロポフ『16-17世紀の都市執行役とグバー長老の構成』2014年」(『ロシア史研究』第96号、2015年6月) 96_KJ00010005068

参考文献・論文 (4)

68.	宮野裕「新刊紹介：セバスティアノバ『古代ノヴゴロド——12世紀から15世紀前半のノヴゴロドと公の関係』2011年」（『ロシア史研究』第94号、2014年5月）94_KJ00009355267
69.	宮野裕「中世ノヴゴロド国の安全保障体制——ヤーニンの近著『ノヴゴロドとリトアニア』に寄せて」（『西洋史論集』第4号、2001年3月）4_30--42
70.	宮野裕「中世ロシアのウラジーミル聖公の教会規定——写本系統樹の検討及び試訳」（『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第51号、2012年2月）KJ00007766879
71.	宮野裕「中世ロシアの教会問答集「キリクの質問」」01（『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第61号、2022年2月）
72.	宮野裕「中世ロシアの教会問答集「キリクの質問」」02（『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第62号、2023年2月）
73.	宮野裕『「ロシア」は、いかにして生まれたか——タタールのくびき』（NHK出版、2023年6月）
74.	栗生沢猛夫・宮野裕「イヴァン四世雷帝の『一五五〇年法典』訳と訳注」01（『北海道大学文学研究科紀要』第116号、2005年7月）116_PR115-185
75.	栗生沢猛夫・土肥恒之「『動乱』とロマノフ朝の始まり」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、第4章）
76.	栗生沢猛夫「モスクワ国家の時代」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、第3章）
77.	栗生沢猛夫「モンゴル支配の開始」（『タタールのくびき——ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会、2007年1月。第1章）
78.	栗生沢猛夫「ロシア史におけるモンゴル支配の意味」（『タタールのくびき——ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会、2007年1月。第7章）
79.	栗生沢猛夫「諸公国分立の時代」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、第2章）
80.	栗生沢猛夫『ボリス・ゴドノフと偽のドミトリー——「動乱」時代のロシア』（山川出版社、1997年6月）
81.	細川滋「キエフ・ルーシの時代」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、第1章）
82.	三浦清美「書評：ジョン・フェネル著、宮野裕訳『ロシア中世教会史』」（『ロシア語ロシア文学研究』第50号、2018年10月）50_163
83.	松木栄三「ロシア史とタタール問題」（『ロシアと黒海・地中海世界——人と文化の交流史』風行社、2018年6月。第4章）
84.	松木栄三『ロシアと黒海・地中海世界——人と文化の交流史』（風行社、2018年6月）
85.	川口琢司「キプチャク草原とロシア」（樺山紘一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月）
86.	中井和夫『ウクライナ・ベラルーシ史』（初出は伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社、1998年12月。新版、2023年5月）
87.	中沢敦夫・宮野裕・今村栄一「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈」11「『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1230～1250年）」（『富山大学人文学部紀要』第71号、2019年8月）71_01-13_Page177to270_nakazawa
88.	中沢敦夫・宮野裕・今村栄一「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈」12「『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1251～1264年）」（『富山大学人文学部紀要』第72号、2020年2月）72_01-08_Page115to200_nakazawa
89.	中沢敦夫・宮野裕・今村栄一「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈」13「『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1265～1287年）」（『富山大学人文学部紀要』第73号、2020年8月）73_01-14_Page229to290_nakazawa
90.	中沢敦夫・宮野裕・今村栄一「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈」14「『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1287～1292年）」（『富山大学人文学部紀要』第74号、2021年2月）74_01-12_Page173to217

参考文献・論文 (5)

91.	中沢敦夫「書評：宮野裕『「ノヴゴロドの異端者」事件の研究——ロシア統一国家の形成と「正統と異端」の相克』風行社、2009年8月）」（『ロシア史研究』第87号、2010年12月）87_KJ00008426925
92.	土肥恒之『ロシア・ロマノフ王朝の大地』（『興亡の世界史』第14巻、講談社、2007年3月。講談社学術文庫2386、講談社、2016年9月）
93.	野田仁『露清帝国とカザフ＝ハン国』（東京大学出版会、2011年3月）
94.	和田春樹「「ロシア」の成り立ち」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、序章）
95.	Empire'sTwilight_Robinson_Chap4
96.	黄育榎原著、澤田瑞穂校注『校注破邪詳辯——中国民間宗教結社研究資料』（道教刊行会、1972年3月）
97.	菊池秀明『越境の中国史——南からみた衝突と融合の300年』（講談社選書メチエ776、講談社、2022年12月）
98.	菊池秀明『広西移民社会と太平天国』史料編（風響社、1998年2月）
99.	菊池秀明『太平天国——皇帝なき中国の挫折』（岩波新書新赤版1862、岩波書店、2020年12月）
100.	結社が描く中国近現代
101.	三石善吉『中国の千年王国』（東京大学出版会、1991年4月）
102.	三谷孝『現代中国秘密結社研究』（汲古書院、2013年12月）
103.	山崎岳「アジア海域における近世的国際秩序の形成——一四・一五世紀の危機と再生」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀」岩波書店、2022年11月、焦点）
104.	山田賢『移住民の秩序——清代四川地域社会史研究』（名古屋大学出版会、1995年1月）
105.	山田賢『中国の秘密結社』
106.	四日市康博「ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「モンゴル帝国と海域世界——一二～一四世紀」岩波書店、2023年4月、展望）
107.	守川知子「宗派化する世界——宗教・国家・民衆」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀」岩波書店、2022年11月、問題群）
108.	孫江『近代中国の革命と秘密結社——中国革命の社会史的研究 一八九五～一九五五』（汲古叢書72、汲古書院、2007年3月）
109.	孫江『近代中国の宗教・結社と権力』（汲古叢書103、汲古書院、2012年6月）
110.	孫江『中国の「近代」を問う——歴史・記憶・アイデンティティ』（汲古選書70、汲古書院、2014年6月）
111.	瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成』10『小説集』04（『皇明英烈伝』など、遊子館、2017年1月）
112.	中砂明德『江南』02「学術の市場」
113.	塚田誠之『壮族文化史研究——明代以降を中心として』（第一書房、2000年9月）
114.	浜本隆志編著『欧米社会の集団妄想とカルト症候群——少年十字軍、千年王国、魔女狩り、KKK、人種主義の生成と連鎖』（明石書店、2015年9月）

参考文献・論文 (6)

115	鈴木中正編『千年王国的民衆運動の研究——中国・東南アジアにおける』（東京大学出版会、1982年2月）
116	Lucio de SOUSA・岡美穂子「奴隷たちの世界史」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀』岩波書店、2022年11月、問題群）
117	久保一之・木村暁・井上治「ポスト・モンゴル期」（小松久男・荒川正晴・岡洋樹編『中央ユーラシア史研究入門』山川出版社、2018年4月。第5章）
118	久保一之「ティムール朝とその後——ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き」（樺山紘一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月）
119	近藤信彰「サファヴィー帝国におけるシーア派法秩序の形成」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻「西アジア・南アジアの帝国——一六～一八世紀』岩波書店、2023年1月、問題群）
120	荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第10巻「モンゴル帝国と海域世界——一二～一四世紀」（岩波書店、2023年4月）
121	坂本勉「未完のトルキスタン国家」（『トルコ民族の世界史』講談社現代新書1327、講談社、1996年10月。改題し、慶應義塾大学出版会、2006年5月。新版、2022年5月、第4章）
122	山下範久「一四～一九世紀における「パワーポリティクス」——ポストモンゴルから自由主義的国際秩序までの帝国間関係の変容」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀』岩波書店、2022年11月、問題群）
123	志茂碩敏「モンゴルとペルシア語史書——遊牧国家史研究の再検討」（樺山紘一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月）
124	寺島実郎総監修『モンゴル帝国とユーラシア史』
125	小笠原弘幸「オスマン王権とその正統性——血統、聖性、カリフ」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻「西アジア・南アジアの帝国——一六～一八世紀』岩波書店、2023年1月、焦点）
126	森川哲雄「ポスト・モンゴル時代のモンゴル——清朝への架け橋」（樺山紘一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月）
127	真下裕之「ムガル帝国における国家・法・地域社会」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻「西アジア・南アジアの帝国——一六～一八世紀』岩波書店、2023年1月、問題群）
128	杉山正明「「婿どの」たちのユーラシア」（『興亡の世界史』第9巻「モンゴル帝国と長いその後」講談社、2008年2月。講談社学術文庫2352、2016年4月。第7章）
129	赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』（風間書房、2005年2月）一部ナシ
130	川口琢司「ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「モンゴル帝国と海域世界——一二～一四世紀』岩波書店、2023年4月、焦点）
131	川口琢司『ティムール帝国』（講談社選書メチエ570、講談社、2014年3月）
132	早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究——現状と展望』（明石書店、2011年6月）
133	島田竜登「構造化される世界——グローバル・ヒストリーのなかの近世」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀』岩波書店、2022年11月、展望）
134	林佳世子「西アジア・南アジアの近世帝国」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻「西アジア・南アジアの帝国——一六～一八世紀』岩波書店、2023年1月、展望）

ご清聴ありがとうございました

地理：モンゴル帝国のアジア統一（1300年頃）



地理：モンゴル帝国が衰退・明の時代（1400年頃）



地理：清の時代（1700年頃）



地理：現代（2019年）



アジアダイナミズム班

学部生 : 野中, 高, 中西, 村上, 日高

大学院生 : 杉, 須貝, 小柳

指導教員 : 金美徳, 水盛涼一